

推薦のことば

この度、「これで完璧！胆膵内視鏡の基本とコツ」（編集：竹中完先生）が、羊土社から刊行されることとなった。本書は小生が2008年に出版し、2017年に第3版まで増版され、今では胆膵内視鏡を学びはじめる先生方の指南本となっている「胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技」の姉妹書である。本書の特徴は小生の本と同様に、内容に統一感をもたせるために、特に竹中完先生が得意とする ERCP に関しては先生自身がほぼすべての項目を執筆されていることである。

優れた内視鏡医の多くは、優れた師匠をもっていることが多い。例にもれず、竹中先生は若い頃に淀川キリスト教病院の向井秀一先生に胆膵内視鏡の基礎を教わっている。したがって、今の竹中先生のなかに流れている内視鏡医としての“血・肉＝知識・技術”は向井先生の教えが基本となっていることは間違いない。しかし、師匠から“学ぶ”，言い換えれば単に“真似る（imitation）”だけでは、優れた内視鏡医とはなり得ない。師匠の教えを咀嚼し、吸収した後に、新しい知見や技術を加えて、さらなる新しい技術を“造る（creation）”ことではじめて優れた内視鏡医となる。その点からは、竹中先生は間違いなく優れた内視鏡医と言っても過言ではない。師匠の向井先生もさぞかし喜んでおられる（誇りに思っている）のでないだろうか。

さて、本書について触れてみたい。本書には単なる胆膵内視鏡の基本手技のみならず、はじめるにあたっての心得からデバイス等に至るまで明快かつ丁寧にわかりやすく解説されており、初学者から中級者の読者に必要にしてかつ十分な内容となっている。何よりも執筆された多くの施設の胆膵エキスパートの面々を見ると、竹中先生の人柄がもたらす交流の広がりや垣間見ることができる。特に同世代のつながりは、小生もメンバーとなっている ASTIA グループ（安田一朗先生の Column, p265 参照）を彷彿させるものがある。この本によってさらにお互いの繋がりを深め、日本を、そして世界の胆膵内視鏡を牽引して行ってほしいと切に願っている。

最後になるが、本書には、竹中先生をはじめとして、若手エキスパートの先生方のエッセンスが数多く詰まっている。これから胆膵内視鏡医をめざす初学者はもちろんのこと、専門領域以外の先生方にも基本手技だけでなく偶発症に対する予防も含めた胆膵内視鏡のエッセンスを汲み取っていただき、ぜひ明日からの診療に役立てていただきたい。

2021年9月

東京医科大学臨床医学系消化器内科学分野 主任教授
糸井隆夫